

学問と教養について

はじめに

日本の旧制大学は、近代のドイツの大学に多くその範をとっているといわれている。近代のドイツの大学は、一八一〇年に創立されたベルリン大学にはじまるが、その創設に尽力したのは哲学者であり、また当時プロイセン文教局長官であったウィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (一七六七—一八三五) であった。彼の理想とする新しい大学理念は、当時の大学の状態を克服しようとするものであった。

この新しい大学理念が克服しようとした対象は二つあって、その一つは学生たちの暴徒化であった。この時代の学生たちが大学へ進学したのは、学問研究のためなどではなく、市民的な義務や勤労の義務に拘束されないで勝手気ままな生活を送ることが出来るからであり、特に大学に進学する大きな魅力は、学生という特権によって兵役義務を避けることが出来たからであった。そのような学生達の集団は、与太者同然で学生の集る所では乱暴狼藉がひどく、当時の大学は学問研究や教育の場所ではなくなっていたのである。

新しい大学理念が克服しようとしたもう一つの対象は、啓蒙主義の浅薄な精神から出発している実用主義的見地からの大学改革、教

育改革の試みであった。啓蒙主義の功利的、実用主義的傾向は、学校制度において職業教育に重点をおいていたのである。

これらの傾向を克服しようとした新しい大学の理念は、旧来の大学のように非実用的な書物による学問を押し進めようとしたのではなく、履習規定や教育課程、学習態度の評定などを強化して「勉強の強制」の方向に走ったわけではない。それは学問研究の「自由な場所」として国家によって保証された大学で、学生たちが研究を通して教養を得ることであった。言いかえれば、フンボルトは学問的教養を目的とした新しい大学の理念をかがけてベルリン大学創設に尽力したのである。

この小論では、フンボルトの学問的教養とは何かを考察することによって、彼の考えていた教養の概念をとらえてみたいと考えている。

一 大学の本質

『大学は学問研究の最高の場所である。』

一八〇九年四月よりプロイセンの文教局長官の仕事を引き受けたフンボルトは、在任一年六ヶ月の間にベルリン大学創設をめざしてプロイセン当局に対していくつかの提案をしているが、その中で最

松 田 幸 子

も重要なものは、「ベルリン高等學術機関の内外の組織について」という建白書である。ここで彼は、大学と大学以前（高等学校まで）の学校との区別を明確に示している。彼によれば、大学以前の学校は研究が完了している事柄についての知識を伝達することを目的とするが、大学はまだ研究が完了していない未知の問題について、教師と学生が同等の立場に立って共に苦勞しながら研究する場所でないければならない。従って、大学では教師と学生の関係は大学以前の学校のものとは別なものとなる。すなわち、「教師は学生のために存在するのではなく、教師と学生は共に学問のために存在する。教師の仕事はまた学生の存在と離れ難く結びつき、学生が居なければ居る時のようには良くはかどらないであろう。だから教師は、学生が自ら進んで自分の周囲に集まらなければ、学生を捜し出して自分の力を学生の力に結びつけ、自分の研究の目標に一層近づこうとするであろう。なぜならば、教師の力は既に熟達しているが、しかしそれ故に学生と比べると容易に一面的となり活気が衰えたものであるのに対し、学生の力は教師の力より貧弱ではあるがまだ一層、不偏不党にあらゆる方向に向って勇敢に努力するものであるからである。」

フンボルトによれば、大学とは人生の門出をする前の数年間を若い人達が実生活から離れて、もっぱら学問的思考に身をゆだねるところである。学問研究という同一目的のために教師と学生が共同作業を行うということが大学の本質であるから、「大学の講義を聴講することは副次的なことである。本質的なことは、志向を同じくする人びとや同年輩の人びとと、もっぱら学問の向上と普及のために没頭している傑出した教養人が大勢いると思われる小さい共同体（大学）の中で、数年間を自己と学問のために生きるということである。」フンボルトは、以上のように大学と学校の差を規定し、職業に必要

な事柄を教えるための学校を大学と区別するように常に主張した。これは一八世紀の後半にドイツ各地に職業専門学校が多数創設されていたからである。すなわち鉱山アカデミー、建築アカデミー、農業専門学校、軍医学校、獣医学校、工芸大学などである。さらに一九世紀に入ってからには、工業大学が設立されていた。

大学は学問研究の場であると主張される場合の教師と学生との関係に注目するならば、次のようなものである。先づ学問研究の場では教師と学生の関係は同等であること、従って学問的な学識の量や熟達の程度はあまり重視されていない。重視されるのは学問研究への熱意や態度である。次に教師と学生の関係が同等であるということとは、共に学問研究に向っている場合のことである。それゆえ、教師も学生も学問研究のために大学に居るのであって、教師は学生に学問研究を指導するために存在するというよりは、むしろ学生が教師の学問研究を助けるために大学に居るのである。さらに教師も学生も学問のために存在するという場合の理想像は、教育において学の伝統を伝達することだけが尊ばれたり、教師個人の人格への敬服とか教師の教えにただ単に感激することが重視されるのではない。

（勿論教育の場では教師への信頼は必要ではあるが）なによりも重視されなければならないことは、学問研究を媒介としての教師と学生の同一水準の立場での問答である。実存哲学者であるヤスパース（Jaspers）（一八八三—一九六九）の言葉を借用して説明するならば、それは「愛しながらの闘い」である。すなわち、教師と学生とは知識、才能、記憶力、疲労度、社会的地位などは異にしているが、互に一切の力を出し合って両者共通の使命である学問研究に従事している点では同等の立場に立って連帯感を持ちながら助け合いながらも、論争しながら研究をすすめていくことである。

『学問研究の拡大のためにアカデミーなしですますことも出来る。』学問研究を重視するフンボルトではあるが、純粹に学問研究を取り扱い若い学生達の教育を必要としないアカデミーを大学以上に評価しようとはしない。「もし大学の使命は授業と学問の普及であり、アカデミーの使命は学問の拡大であると説明するならば、これは明らかに大学に対して不正を加えることである。確かに学問はアカデミーの会員によって拡大されたがそれと同様に、そしてドイツにおいてはそれ以上に大学の教師によって拡大された。……大学においては学問は絶えず多くの群れ、しかも活発な若々しい頭脳の群れの中を転がし回されるので、学問の進行は明らかに大学において、より迅速であり、より活気がある。……大学が適当に管理されていれば、学問の拡大を純然たる大学に委ね、学問の拡大という目的のためにアカデミーなしですますことは確実である。」このフンボルトの言葉から彼が学問研究の場として関心を深くしていたのは大学だけであったことが理解出来る。それは彼が学問研究の拡大のためには、学問研究に熟練した頭脳の持ち主と、さらに活発で若々しい頭脳の群れが必要であると考えていたからである。フンボルトは、アカデミーが国家から独立した団体であり、学問のための最高で最終の避難所となることをアカデミーの理念と考えていた。その理由は、彼の考えていた大学は国立大学であった事に由来する。というのは、大学は常に青年の指導という国家の実務を引き受けているので、大学は常に実生活と国家の要求とに密接な関係を持っている。それ故、もし国家が大学の究極目的である学問研究の自由を目的そのものとして取り扱わないならば、つまり大学における学問研究を国家が自分自身のある目的の手段とする場合には、精神の奥底から創造される学問にとっての一切のものが消えてしまうからである。このよう

な場合、学問の避難場所となるのがアカデミーであるとフンボルトは考えた。

二 学問による教養

フンボルトは「ベルリン高等学術機関の内外の組織について」の中で、「大学の本質を内面的に見れば客観的な学問と主観的な倫理的教養とを結合することである」と述べているが、この場合の学問による教養とはどのようなものであるのか、それを理解するための鍵は、「内面から由来し内面に植えつけられる学問のみがまた性格をも改造し、そして国家にとっても人類にとっても知識と雄弁ではなく、性格と行動が重要である。」という彼の言葉の中に含まれている。ここでは学問することによって得られる学識や雄弁よりも、学問研究を通じて性格が改造されることが教養として重視されている。では一体、フンボルトは、学問研究を通して得られる「どのようなもの」によって、また「どのように」性格が改造されることが人類にとって大事であるというのであろうか。学識が重視されないならば、あとに残るのは学問研究の態度と学問の認識形式を通して得られる教養である。そして前者の根本が「孤独と自由」な生活態度であり、後者の根本は「全体の精神において思惟すること」である。

『孤独と自由』 フンボルトの大学の理念に従えば、大学生活を支配しなければならぬ原則は「孤独と自由」である。この場合に、孤独と自由とは表裏一体をなすものとして考えられている。その本来的意味は、純粹な学問研究の主体は自由なる個々人であるという意味である。それだからこそ、彼はリタウエン学校計画案の中で次のように述べている。「人間がただ自分自身にとって、そして自分自身において見出し得るところの、すなわち、純粹な学問への洞察が

大学のために留保されている。本来の意味における自己の営みのために」と。学問研究は本来の意味における自己の営みなのである。それ故、大学の生活には「孤独と自由」が支配的でなければならぬ。その意味からも、大学では教師の講義を聴くだけという受身の行動は、大学本来の課題ではない。そうは言っても、フンボルトが講義の意義を全面的に否定しているわけではない。むしろ、彼は教師が自分の学問上の着想をまとめ、それを講義することで教師自身の学問研究の刺激になるような講義なら有意義であると認めている。その場合には、学生の自由意志的な聴講と、教師と学生の共同討論が予想されている。ただフンボルトは、原則的に「大学の教師は学生たちがみずから学習するのを遠方から指導すべきである」と考えているのである。彼によれば、大学とは、教師と学生がそれぞれ孤独にして自主的な学習をするという共通の生活態度をとることが大切なのである。しかしながら、この「孤独と自由」な生活態度をとるということは、たった一人で自由勝手に研究することを意味しない。孤独で自由な立場で研究されたものについて共同討議をするこゝとによって研究は進歩するという考えと結びつく。すなわち、「人類の精神的活動もまた、共同活動としてのみ繁栄することができ。しかも、これはある他の人の欠陥を補うためばかりではなく、ある人の成就しつつある仕事は他の人を感動させ、そして個々人のうちにただ個別的、あるいは派生的にのみ輝き出る普遍的根源力がすべての人々に明らかとなるためでもある。それゆえこの種の機関の内部組織は絶えず活気づいているが、しかし強制的でも意図的でもない不協の共同作業を出現し、これを維持するものでなくてはならない。」このような「孤独と自由」によって支配される研究生活の主張の背後には、また次の意味も含まれている。たとえ一時的にせよ、

学生が「自己と学問のためにのみ」生きるには、社会的な周囲の世界から隔離された孤独を味わうべきであり、また学生たち相互の学問的でない交際はつつしむべきである。

ところで学者の生活原理である「孤独と自由」が学生にも要求されている大学理念の中には、大学では学者的な生活態度の伝授がなされるべきであるということが含まれていると考えてよいであろう。その点に関して、ヘルムート・シュルスキー Helmut Schelsky (一九二一) は明確に述べている。「フンボルトにとって大学というのは、ある結果をめざした専門的職業教育を仲介すべきではなくて、人間の全生涯にわたって作用を及ぼす存在形式を与える所であったことは明白である。」大学教育は「プロフェッサーと 学生との共同生活において伝授される存在形式こそがまず第一である。つまり知識ではなくて存在が仲介されるべきなのである。」大学は研究と教育の機関であるとしばしばいわれるが、フンボルトの大学の理念から見れば、大学における教育内容は「孤独と自由」な研究態度の伝授ということになろう。このように伝授されたものが学問による教養の一つなのである。つまり、環境の影響から完全に独立して自身自身を見失わずに自発的、生産的に思惟する能力が身につくことである。

『全体の精神において思惟すること。』あらゆる純粋な学問認識は、知識と真理の全体に向けられなければならない、という哲学的な学問観がある。しかし前にも考察したように、学問の本質が研究でありまだ未解決の問題を取り扱うことであるから、学問とは「まだ完全には発見されておらず、決して完全に発見されることもないもの」として絶えず追求されなければならないものである。従って学問の領域は様々な現象がある限り広がり得るわけである。その上、

学問の対象は考えられる素材ばかりではなくて、「考える」という精神活動もまた一つの現象として学問の対象となることができるので、学問の領域を全体的にとらえることは不可能なことであらう。それ故、フンボルトは「全体の精神において思惟すること」を、あらゆる世界的事実との包括的なコミュニケーションを求めることであると解釈した。つまり、あらゆる世界的事実の探求を通して人々がそこで感じとった精神的なものの全体を、個人の中へと摂取同化する方向を求めたのである。

このようなフンボルトの考えに反して、ベルリン大学の初代の学長であったフィヒテFichte(一七六二—一八一四)は、「全体の精神において思惟すること」とは「思惟全体の統一」であると考え、その「思惟全体の統一」を大学の制度の中にも取り入れる必要があると考えた。それ故、大学が自らの内部で研究するあらゆる学問的な対象物が有機的に統一されるためには、ただ一人の哲学者が大学の学問研究を支配的に指導すべきであると言う全く実現不可能なことを提案している。

「学問的に思惟することは全体的な精神において思惟することである」という意味を、フンボルトは、さらに次のように具体的に解釈する。それは彼の学問論が展開されている「人間育成論」の中にみられる。学問研究をしている学者が、ただ自分の専門分野にのみ専念するあまり、一面的な真理のみを発見し、特殊な結果だけを獲得するために、考え方において一面的な傾向を持つことは、人間として不幸なことである。それ以上に悪いのは、自らの特殊な専門を持つこともできずに、ただあらゆる専門分野から、自らの教養のための利益を引き出そうとする人達である。それら両者にとっては、学問研究は時間つぶしの遊び道具にすぎないものとなる。しかしそ

れぞれの学問は人間育成に関連しなければ価値がない。従って、真に学問研究を押し進めていく学者は、自分の専門分野の研究をしなから更に他のあらゆる専門分野の研究対象の世界の理解を深める方向に努力しなければならない。なぜならば、そこで得られる全体性により、学者は自分の人格の中なる人間性を豊かにし、そのようにして学問は人間性の拡大に貢献できるからである。以上のような、フンボルトの「人間育成論」の論旨は、学問研究によって身についた全体性への思惟が、同時に人間の道徳化に役立つであろうという根本確信を示している。ここにも彼は学問による教養を認めている。

これまでの考察から、学問による教養とは学問研究の態度や思惟形式を身につけることで得られるもの、つまり学問的精神であることが明白になった。しかし学問的精神がそのまま教養であるというわけではない。厳密に言えば、それは教養の条件なのである。その点に関しては、フンボルトの教養の概念を次に考察することにより判明する。

三 教養の概念

フンボルトの教養論の背後には一つの人間観が控えている。人間はすべて個別的であり、人間としての一側面を持っているにすぎず、人間に可能なすべての能力を完全に自己の中に持っている。例えば人間は誰一人として純粋な意味での人間ではない。必ず男か女であり、さらにその上、各人別々の性質を持っている。「比較人間学のプラン」の中でフンボルトはそのような男女の相異について述べている。要約すればそれは次のようなものである。男と女は身体づくりの相異と同様に知的能力や美的なものに対する感受性についても、その他の能力や性格についても大きな違いがある。女子は直接

的な価値や内容を持っているものに対しての考察に非常に強い愛着を示すのに、間接的なものや象徴的なものへの愛着は非常に少ない。また女子は現実によって自分の中に生ずる印象に耽ることが多いので、現実を分析したり精確に探求するといった事柄にはあまり得意ではない。そこで自然と理念の間を関連づけながら事物の本質を把握したり、純粹な真理の探求を行うということに關しては、男子の本性を通して助けられることが多くなる。このように述べるフンボルトはここで男女の優劣を問題にしているのではなく、性格の違いを述べているにすぎない。そしてまた二つの性格が助け合い結合することによってこそ、よりよい結果が生ずると述べているのである。例えば男性の精神が随意的の着想やつまらない考えで疑いためらっている時、女の健康的で自然な洞察が男性の精神を元気づかせ、しつかりさせることが出来るといったようにである。

各人は自分の性質をよく洞察し個性的に成長することが出来るだけである。また一人の人間が多くの能力を持っていたとしても、一生のうちで実現出来るのは多くの理想のうちで一つだけであらう。その場合、人は一面的性格しか持てず、考え方も片寄ることになる。そのような状態では眞の教養人にはなれない。人間は人間の究極の目的として、人間の持ち得る諸々の能力を各人が体現しなければならぬのである。人間が完全な人間であるためには、人類が一人の人間の中に体現される必要がある。これがフンボルトの言う教養の内容なのであるが、結局それを完全に実現することは有限な人間にとつては不可能なことであつて、それは各人が無限の努力によつてそこへ到達しようとする理念なのである。

結局、フンボルトは個々人が自らの人格の中に普遍性をもつことが教養であると考えてるのである。そこで次のような言葉で教養を説

明しようとする。「世界と人間性を自己自身の人格へ変えることが言葉の最高の意味における人間の生活である。」われわれの人格の中の人間性を豊かにするには「われわれの自我を世界と結びつけ、もっとも一般的に、もっとも活発に、もっとも自由な相互作用をひきおこさねばならない。」ところでシュプランガーは、フンボルトのこのような教養論の目標を「個別的無限性としての人間である」と比評している。

フンボルトによれば、人格の中の人間性という概念に盛沢山の内容をつけ加えることが出来る人、つまり眞の教養人は自己の周囲に対して自主的に正しい判断を下せるようになり、徳を實踐することが出来るのである。彼は、人間の行う徳や悪徳を教養にかかわる問題としている。徳とか悪徳とかは「諸々の人間の本性に付着しているものでも、また諸々の性格的側面に必然的に結びついているものでもない。徳や悪徳は、さまざまな性格的諸々の傾向性の調和、不調和にもとずくところが非常に多い。」「個々人の個性の中へ普遍性を宿す」ことがフンボルトの教養観であるが、その理由は人類という普遍的立場から行為することが徳と結合すると考えるからである。その点に關しては、シュプランガーがフンボルトの教養観はカント Kant (一七二四—一八〇四) の思想に基礎をおいていると述べていることは正しい。シュプランガー Spranger (一八八二) の指摘を待つまでもなく、フンボルトの教養論には、「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行爲せよ」というカント倫理学の根本法則がよく生かされていることは明瞭である。「教養は倫理と結びつく」このような倫理的教養の条件となるものが、フンボルトによれば人間の知的な自己教育という形態であつて、特殊より普遍を求める純粹な学問的精神を身につけることなのであ

る。それゆえにこそ、彼は「ベルリン高等學術機関の内外の組織について」の書き出しを次の言葉で飾っているのである。

「高等學術機関は、国民の道德的文化のために直接的に生ずる一切のものが集合する峰である。このような峰としてのこの機関は、言葉の最も深い最も広い意味での學問に従事し、そして、學問を、精神的倫理的教養のための材料として、つまり意図的ではないがおのずから合目的に準備される材料として、国民の利用に委ねることに基づいている。」

おわりに

職業教育よりも普通教育を、特殊より普遍をというフンボルトの教育の理念は、大学教育だけのものではない。学校制度は、小学校、ギムナジウム、大学と一貫して普通教育がなされるべきである。彼によれば、実生活の要求するもの、個々の職業が要求するものは、学校教育から引き離すべきであり、それは完全な一般的教育の後で習得されるべきのものである。もしこの二つが混同されるようなことがあれば、人間の育成は不純なものとなってしまう。人間を一定の型にはめることなく、自由人として育てることが教育の最高の目的であり、自由人のもとにこそ家族の絆も親密となり生業はより前進し、すべての芸術や學問も繁栄し、立派な教育者や政治家も育つのである。

註

- 1) Wilhelm von Humboldt, Über die innere und äußere Organisation der höheren wissenschaftlichen Antalten in Berlin (1810).

- 2) Wilhelm von Humboldt, Litauische Schulplan (1809).
3) (1)と同じ
4) (2)と同じ
5) (1)と同じ
6) Helmut Schelsky, Einheit und Freiheit (1963).
7) Johann Gottlieb Fichte, Deduzierter Plan einer zu Berlin zu errichtenden Höhern Lehranstalt (1807).
8) Wilhelm von Humboldt, Theorie der Bildung des Menschen (1793).
9) Wilhelm von Humboldt, Plan einer vergleichen den Anthropologie (1795).
10) (8)と同じ
11) Eduard Spranger, Wilhelm von Humboldt und die Reform des Bildungswesens (1960).
12) Wilhelm von Humboldt, Über öffentliche Staatserziehung (1792).
13) (11)と同じ